

からゆきさん

米田 哲夫（竹の台）

最近、若い女性の海外売春が横行していることを報道で知りました。ふと、明治から大正期に“からゆきさん”と呼ばれた「海外売春婦」がいて、その人たちが舞台になった芝居を思い出した。その代表作は山崎朋子作の「サンダカン八番娼館」です。文化座が78年、93年と二度上演しています。底辺女性史を研究する女性(佐々木愛)が、天草で貧しい老婆(鈴木光枝)に出会う。だれも上がろうとはしない老婆の部屋で昼寝までしてしまった女性。そこから、老婆との交流がはじまる。天草は土地が痩せていて、貧しい農家が多く、徳川時代から明治にかけて底辺女性を利用して「からゆきさん」として南の国へ売却されていった。「からゆきさん」とは、「唐人行」(からゆきひと)または、「唐ん国行」(からんくにゆき)という言葉から来ていて、わが身を売った海外売春婦を言う。舞台は貧しい部屋で語り合う二人の親密感が、光枝・愛という母娘の二人の女優の親しみ感でいっそう深まり、私たちを感動の世界に染みこませてくれました。ちなみに、天草に隣接する島原半島南端に口之津民族資料館があって、「からゆきさん」の歴史が展示されている。また、「サンダカン八番娼館」は熊井啓が監督をして田中絹代、栗原小巻のコンビで映画化もされています。



文化座は1981年に山崎朋子作の「あめゆきさんの歌」も上演しています。明治時代中頃家を助けるために、山田わかにはアメリカへ女中奉公として渡るが、白人専門の売春婦に売り飛ばされます。わかにはサンフランシスコの山田塾で英語を学び、帰国後明治の末、婦人運動に参加していく。作者、山崎朋子は雷鳥など経済的に豊かだった婦人活動家でなく、底辺から生きのびた山田わかには焦点をあてて「あめゆきさんの歌」を描いた。わかには語学中心の学問を社会に生かし、当時の婦人解放運動に参加していきました。後年には売春婦の厚生施設に全力を注ぎます。文化座の伝統ともいえる底辺に生きた女性を描いたこの舞台は、「土」「荷車の歌」で主演した鈴木光枝によって多くの感動を与えた。公演の前日、出演者全員参加の「あめゆきさんの歌」の前夜祭が行われたことも記しておきます。

1977年の青年座公演、宮本研作の「からゆきさん」(石沢秀二演出)は、時代と向き合う海外売春婦として宮本研は描きました。貧しい天草は海に向き合って世界に広がる天草でもありました。小学校の校庭で出会ったパラソルの女性に上海連れてってと頼むところから舞台は始まる。シンガポールの日本人娼館はマレー人、インド人、中国人、白人を相手にする女性たちの稼ぎ場でした。日露戦争も勃発、国防献金のために女たちを稼がせ、国へのご奉公をなしとげていくが、娼館廃止と共に女たちは本国へ強制送還されていきます。女たちは国の決定にさからってさらに南の島へ出かけていく。「棄てられたら、棄て返せ」の娼婦の言葉は、果たして今日に生きる私たちが、国から棄てられたら、「棄て返せ」というほどの生きざまがあるだろうか。当時、私たちは「からゆきさん」から突き付けられたのを思い起こします。天草で生まれた宮本研は「からゆきさん」に何を託したのだろうかと考えさせられた舞台でした。青年座の東恵美子、初井言栄、今井和子たち優れた女優陣は「からゆきさん」の舞台をいっそうもりあげてくれました。前述した口之津民族資料館を訪問した私は、すぐ前の天草も旅した。宮本研が通った小学校(パラソルの女性)も訪れ、海に面した宮本研顕彰の碑にも訪れて「からゆきさん」と宮本研を偲びました。